

水ガソリン詐欺事件

海軍燃料廠はいわば化学者集団であり、化学の府である。その燃料廠へ、かつて「水からガソリンがとれたので、その実験をさせてくれ」と言ってあらわれた男がいる。もちろん水 H_2O から石油（炭化水素）をとることは、元素から考えても不可能なことであるが、時の吉岡保貞廠長はこの実験を許した。しかし到底水から石油などできる筈がなく、実験途中で病氣と称して、実験を投げってしまった⁽¹⁾。

その同じ男が、同じ触れ込みで東京にあらわれて、時の首相近衛文麿や、海軍の首脳部を手玉にとったというから、全く驚き入った話である。

この話は、当時海軍省軍需局員であった渡辺伊三郎氏が「化学に弱かった日本海軍」と題し『日本海軍燃料史』に執筆して、かなり周知されている。それをここに紹介する理由は、この事件と同様な詐欺事件が別に発生しており、両事件を併せて考察するとき筆者は「化学に弱かった日本海軍」とは異なる所見を、抱かざるを得ないからである。我が国上層部が石油枯渇に如何に悩んだか、そうしてその悩みから生じたものは何であったかを物語る二つの事件である。

『日本海軍燃料史』の渡辺伊三郎氏に従って事実の概略を誌すと……「或る日閣議のあとで、近衛総理から、「僕のところの井戸水は大変なものだよ。あの水がガソリンになるそうだと発言があり、米内海相に「調べてみたら」と耳内があり、海相から軍需局長に話が伝えられた。軍需局では詐欺行為であることを熟知していたので取り上げるべきではないと結論された。⁽²⁾」

軍需局から実験申込みを断られたこの詐欺師（自称町の化学者・本多維富）は、話を海軍航空本部に持ちこんだ。同局教育課長大西瀧治郎大佐は本多の言に動かされて、これを信用し、航空本部長豊田貞治郎中将、海軍次官山本五十六中将等に働きかけて、海軍大臣官邸において実験が行われる形勢となった。このことを聞いた柳原博光少将（元軍需局課長・燃料局部長）は中止を勧告したが大西大佐らはききいれず、実験場所のみを、大臣官邸を取りやめて、航空本地下室に変更し実施されることになった。実験委員として大西大佐を委員長とする 30 名が任命された。実験そのものには反対したが軍需局からは柳原少将の指名による渡辺伊三郎軍需局員が入って「実験」に立会った。ものものしく振舞う本多らの実験は昼夜 3 日間にわたり、立会人達の疲労が甚しくなった頃に「成功した」と称しガソリン入りの瓶が取り出された。渡辺委員は予め実験用ガラス瓶の特徴を控え、すべて番号を付しておいたため、当該瓶は途中持ちこまれたものであることを見破られ、本多は海軍軍務局によって警察に引渡され幕切れになった。

柳原少将によると、この事件後大西大佐からは柳原に対し、不明を詫びる手紙が送られたが、山本五十六次官は何の挨拶も無かったという。

この実験の行われる以前にもかつて、この本多という詐欺師は、海軍航空本部へ「水からとれたガソリン」の見本と称する油の瓶を持ちこんだ。航空本部では「海軍軍令部と両者立会の下に実験をして、確かに水が石油になる事を認めた。就いては当時の製品の見本を送る故、研究してもらいたい……」と海軍燃料廠（徳山）研究部へ、見本に依頼文をつけて送ってきた。念のため分析してみると「海軍二号外部鉱油」の規格に適合する潤滑油であり、致底水から出来る筈のものではあり得なかった⁽³⁾。以上は元海軍燃料廠研究部

技師の『秋田穰遺稿集』中で述べられているが、そこで海軍燃料廠研究部では、この見解を述べ今後一切取合わないようにと返事したら、航空本部から再度連絡があったが、詐欺であることには一向気付いていなかった。「……回答したら、折返し本法は何でも見本通りのものが出来るので、実験に立会った時、偶々手近にあった潤滑油を、見本として出したので、それと同じものが出来たというわけである。本省方面では、水が原料となつて、しかも希望する製品が出来るとは結構なことと期待して居る事故、一度燃料廠でも実験させてみるよと言つて来たが、吾々は一笑に附して取合わなかった。(4)」(傍点筆者)上記航空本部書簡傍点部分が、その航空本部関係者が全く非科学的な空想を願望として抱いていることを証明している。このような空想的願望を多くの人が抱いているのを知っているからこそ、詐欺者の活躍の余地が存する。近衛首相、山本五十六、大西瀧治郎といえ、そうそうたる一国、一軍の統卒者、指導者である。たとえ化学の知識に乏しくとも、専門家の言に聴く耳を有する筈であるが、彼らが詐欺師に乘じられたのは、彼らが石油枯渇症状的心理から強い空想的願望を抱き一種の異常心理のトリコになったのではないかとおもう。

同じ時期におこった同様事件で、更に大規模な詐欺事件が起っている。これを併せて紹介し、総合的見解を述べることにする。これも柳原博光著『石油の波に想ふ』に述べられている、富士山麓石油井戸試掘詐欺事件である。

「神のおつげで(赤坂のおみきばあさんという人があった)富士山麓に油田があつて、掘れば必ず出油するというので、実業界の人で3人が主となり、資本金百万円以上を出し試掘していたのである。

中々石油は見ないが昭和14年或る時石油が出たというので大騒ぎとなり、知名の人に視察にきてくれということになり、内閣総理大臣各閣僚、宮内大臣、その他議員、要路の人に、電報を以て通知し東京より特別貸切り客車で案内することになった。……(5)」

結局80名の見学者一行に同行した海軍燃料関係者の持ち帰ったサンプルを分析すると、原油ではなく、掘さくポンプに用いた機械油が汲み上げられたことが判明し、これも明白な詐欺事件であることが分った。

上記2事件にはいくつかの共通点がある。前者は水から石油がとれる、後者は休火山富士山を掘れば石油がとれると、いずれも自然科学のイロハを無視した話をネタにして、政界や軍の指導層に対して働きかけ、彼らが或る所まで、詐欺師に乘ぜられたことである。ここに至った原因について考察したい。

既述のように渡辺少将は「化学に弱かった日本海軍」において、水ガソリン事件の原因として、海軍兵学校における化学教育の軽視からおこったとされたが、筆者は個人個人の学識の問題ではなく、当時の石油資源涸渇状況下の異常な社会心理的現象であるとの見解を持つので、之を述べてみたい。

まず詐欺師の口車に乗ぜられた面々は高等教育を受け、判断力にも優れた指導層で、平常時なら化学地質学の専門家の言を判断するだけの見識を持っている筈である。しかしこの時期には甚だしい石油資源涸渇状況のため「石油への渇き」が我が国指導層の心理に潜んでいた。同様な心理状況は多くの人々の共通心理になっていて、たとえ空想の中にでも、石油資源が出現してほしいとの願望が社会の間に広まっていたことが、背景になった異常

心理現象ではなかろうかというのが、私の見解である。

心理学の教えるところでは、人間は何かの問題で極端に不快を感じると、そのストレスから逃れるために自己の精神作用の抑圧機能を持っているという。抑圧は異常心理となつてあらわれる。「抑圧の一つの例は記憶喪失症である。記憶喪失症の患者は自分の不安や恐怖のコンフリクトに関連ある事柄を忘却するだけでなく、その事柄の生じた時期におけるすべての事実を意識の世界から忘却してしまうものである。(6)」

彼ら指導者らは引用文の後段のような重症ではなく、不安を与える原因の石油に関する合理的知識を一時的に忘却して、不安から逃げようとしたということが、できるのではないか。渡辺少将の説のように化学知識には弱かったかもしれぬが、専門家の説明にも耳を貸さない程になったのは、一時的ではあるが異常である。詐欺であることが判り、その一時的な迷い(異常心理)から復元したので、大西大佐らは詫手紙を書くまでに至ったのであろう。

富士山麓石油井戸試掘事件では、我が国上層部の多くが、石油の常識を忘却することで、石油枯渇の苦痛を逃れようとした。そのような防衛機制が働いたところに落穴が待っていたということであろう。

注

(1) 渡辺伊三郎「化学に弱かった日本海軍」『日本海軍燃料史』1197・1198頁。柳原博光著『石油の波に想ふ』中にも同様記事がある。

(2) 同書「化学に弱かった日本海軍」『日本海軍燃料史』所収。

(3) 秋田穰「馬鹿馬鹿しい話」『秋田穰遺稿集』昭和22年3月17日刊行、6頁。

(4) 同書「馬鹿馬鹿しい話」。

(5) 柳原博光著『石油の波に想ふ』昭和39年8月10日、原書房、126頁。

(6) 松山義則編『講座心理学12 異常心理学』1969年、東大出版会、193頁。